

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書

平成29年6月8日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団  
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 農学研究科農学専攻

職 名・学 年 博士後期課程3年

氏 名 藤 竿 和 彦

助成の種類	平成29年度 ・ 国際研究集会発表助成Ⅱ期		
研究集会名	アジア作物学会		
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input type="checkbox"/> 口頭 ・ <input checked="" type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他( )		
発表題目	Effect of continuous maize cultivation on soil condition and yield in Northern Laos 北部ラオスにおけるトウモロコシ連作の土壌環境と収量への影響 (和文)		
開催場所	韓国・済州特別自治道・西帰浦市・International Convention Center		
渡航期間	平成29年6月4日 ～ 平成29年6月7日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> 有( 写真 )		
会計報告	交付を受けた助成金額	100,000円	
	使用した助成金額	100,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	交通費	45,460円
		学会参加費	23,150円
宿泊費等		31,390円	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 今回、学会からの日程開示などの連絡が遅く、財団の方々にご迷惑をおかけしたにもかかわらず、誠意に対応して頂き、参加の有無に関する証書の提出に関して柔軟に対応していただき助かりました。財団の方々には感謝しております。		

### 【学会の概要】

学術集会名：第9回アジア作物学会

開催場所：韓国、済州道、

開催期間：平成29年度6月5日～平成29年度6月7日

アジア作物学会はアジアにおける作物学分野の研究者が成果を報告する場として、3年に一度開催されている。第9回アジア作物学会においては中国からの参加者が辞退したために、参加者が少なかったものの、400人以上が出席した。学会期間中に口頭発表が43題、ポスター発表が294題行われた。作物特性に関する多様な研究が報告されていた。

### 【成果】

報告者は第9回アジア作物学会にて「ラオス国サイニャブリ県の農家圃場におけるトウモロコシ連作の生産性に与える評価」という題目で、ラオスにおける土壌肥沃度とトウモロコシ収量が低下している現状を発表した。本発表はアジアの途上国からの参加者に興味をもってもらうことができた。ラオスの隣国であり、ラオスと同様にトウモロコシ栽培が盛んなベトナムからの参加者には、生産の状況は二国間で異なるものの、栽培方法によってはベトナムにおいても土壌劣化と生産性の低下が起きている可能性があることに興味をもってもらった。加えて、この発表を通して、意見を交換し、議論を深めることができた。議論の中で、土壌劣化を食い止める方法を模索することが重要であることを確認した。ただし、労力的に経済的にすべての土壌管理を農家が受けられるわけではないこともまた議論の中で再認識した。途上国で収奪的な農業を是正し、土壌肥沃度と生産性を維持するためには、現地の状況に合わせた方法を取らねばならず、更なる研究が必要であることを再認識することができた。今回得られた意見を今後の研究に役立てたいと思う。

### 【学会の様子】

本学会では多様な研究題目が発表されていた。開催国であった韓国からは多数の発表があったが、その多くは遺伝子の解析、遺伝子の発現解析、タンパク質の解析であった。そして、こうした解析技術を用いて、ストレス条件下での作物の応答の研究や、健康増進に関わる機能性作物の研究が盛んに行われていることがわかった。また、インドネシアからの参加者らの多くは、遺伝子解析に基づく育種によって良い品種を作成してきた成果を強調する発表を行っていた。一方で、発表題目の全体を通して、作物の生育の解析や圃場の環境評価に関する研究については重要であるにもかかわらず、ほとんど行われていないと感じた。日本では遺伝子解析や遺伝子発現の研究が盛んなものの、生育に関する研究も行われている。国ごとに研究状況が大きく異なることが伺われとともに、作物生育に関する研究が少ないことがわかった。また、研究対象については、日本では研究が盛んでないイモ類とソルガムの研究例が散見されたものの、研究対象は水稻が中心であり、他の作物種を対象とした研究例が少ないと感じた。作物生育及びマイナー作物の研究に取り組む必要があると考えられ、今後の課題であると認識

した。

研究発表の中には、報告者の研究と同様に、ケニアにおける稲作生育及び生産性の向上に向けた研究を行っていたものがあった。今回、この研究を行っている研究者と交流し、研究での達成状況や課題について、発表されていた内容以上に詳しく聞くことができた。彼らの研究方針や方法は報告者の研究のものと似ていることから、大いに勉強になるとともに、自らの研究への重要な示唆を頂くことができた。

